

テント一週一文（そ）——

紹介：「伊方原発をとめる大分裁判の会」

（承前）

「夏テント 留守番独り 弁当かな」と独り言を言いながら、バッグの中の弁当を探っていたら、「こんにちは！」と大きな声で、「入口」の透明シートを押しやって珍しくビジネスマンが入って来た。

「いやあ、暑いですね」と、私は急いで弁当をバッグに戻して大きな声で返した。テントの船も波に向かって進んでいると、時にはお客も訪ねてくるものだ。彼は、手許のイスに座りながら、大きな声で「お久しぶりですね。村長さんは？」と返してくる。「お久しぶり」と言い、村長さんを知っているということは、彼はたまたま波に乗ってきたお客ではなく、常連なのかもしれない。

私が「いま……」と言おうとしたら、彼は「村長さんは忙しいからね」と、こちらのことは聞こうともしない。「村長さんは？」と尋ねたのもまったくの義理のようだ。

「久しぶりに福岡に来たので、村長さんに挨拶をしておこうかと思ってね」

「どちらから？」

「今日は大分から回ってきた。昨日大分に着いてね」

私が「大分からですか。遠くから……」と言いかけたら、この方は人のことはあまり聞かないようだ。「遠くはないよ。朝出て、こちらでもう一つ仕事をやってきたよ。午後からは前原(福岡県糸島市の地名)の方だよ」

「それは大変ですね。前原はここから1時間位かかるでしょう」と聞いても、私の質問は無視して、「あなた、テントは初めてだね」と自分が言いたいことしか言わない。

私は「初めてじゃないんですけど……」とつぶやく。

彼は「初めてじゃなくて、2度目？」と問うてくる。やっと会話らしくなってきた。

「まあ、そんなもんですが……」

「このテントは毎日開いているの？」

「月曜日と火曜日と……」

「そうか、毎日じゃないのか。それに比べると大分市のおばちゃん元気がいいよ。毎日だよ」

「大分市のおばちゃん？」

「島田っていう人。毎日、午前の1時間と午後の1時間、計2時間九電大分支店の前に立って抗議をしているよ。しかも毎日抗議文を書いているらしい」と、彼はやっところちらの尋ねることに反応してくれるようになった。

「毎日ですか？」

「そう、364日。正月だけは休むんだって。地元の新聞が好意的に取り上げてくれているよ。先日も、と言っても2017年7月5日だけど、大分合同新聞の夕刊に写真入りで紹介されていたよ」

「日曜日も？ 驚異的ですね。お独りで？」

「支援者が10人位いて、一緒に立つ人は日によって3人とか5人とか。誰もいなくても、島田さんは1人でも立っているけどね」

「このテントは2011年4月から6年たつそうだけど、島田さんもそれ位？」

「島田さんは2011年7月から。だからやはり6年だ。」

彼の話は続く。

「大分県には海を挟んで伊方原発がある。2016年7月には「伊方原発をとめる大分裁判の会」が発足したよ。ホームページもあるから見て。」

<http://ikata-sashitome.e-bungo.jp/home/>

と、私が尋ねないことにも話題を広げてくる。もしかしたら私の聞き方が上手なのかもしれない。

私は「やはり、ランソノカイですか？」と尋ねる。

彼は「何それ？」と答え、会話が続く。

「イエイエ、私も知らないのですが、ついさっきまで、裁判の話題が出たときにこれを呪文のように言う方がいたので、ご存知かと思って」

「知らないね。そしてね、その会発足の直前に、伊方原発運転差止を求める仮処分を申し立てた人がいるんだ。正確に言うと2016年6月28日に申立てがあり、7月2日に会が発足。この申立てはね……」と、張り切っている。

彼は元気だ。きっと昼食を食べ終えているのだろう。私は食べ損ねてしまった……

彼の説明は続く。「申立てはたった1人で始めたんだ。ただ7月4日には続いて参加した人たちがいて、今は仮処分の申立人は4人だよ」。

この説明の張り切りようからすると、1人で始めたのはこの方じゃないのだろうか。

私は思わず「その申立て1人っていうのは、あなた？」と尋ねた。

彼は「イエイエ、私じゃありませんよ」と答える。

私は「じゃーあなたは支援者？ こちらも、支援者は10人位いるのですか？」と尋ねると、彼は「あなたは若いのに平気で嫌なことを言うね。それ天然？ それともポウズ？ どちらにしても営業には向かないね」

私は「僕も営業です。こういう言い方に誘い込む方が、さっきまでここにいらっしやっただですよ」と小声で答える。

彼は「そう……。あなたは人の影響を受けやすい性なんだ、きっと。マ、それはいいとして。昨年9月末には「伊方原発差し止め訴訟」を提訴して、「大分裁判の会」は原告を100人の大台に乗せたいと意気込んでいたんだ」と話す。

私は「いたんだ」と過去形でおっしゃっているってことは賛同者が少なく、こちらは10人位？」と反応する。

「100人どころか、今年17年7月には378人の大原告団になったよ。昨年4月に熊本・大分大地震があったら。あの地震を目の前になると、伊方原発は海の向こうだとは言え、万一のことがあると大分県もとんでもない被害をモロに受けるとみんなが心配するようになったからだよ。それに、伊方原発は中央構造線断層帯から5キロ位しか離れていないから、さらに不安は大きいんだよ。福岡市のあなたたちは玄海原発が心配でしょう。そういえば、福岡市は玄海原発からどれくらい離れているの？」

「福岡市は 50 キロ位で、福岡県の一番西にある糸島市の一部は玄海原発 30 キロ圏内ですよ」

「大分市は伊方原発から 60 キロ位だけど、大分県内の佐賀関や国東市は 40～50 キロだからね。距離は同じくらいで、原発事故の心配は変わらないんだよ」

「それで、「大分裁判の会」は、今は2つの裁判を闘っているわけですね」

「そうだよ。仮処分申請の方は、この前7月に裁判があつて、今回は10月。これが結審になるかもしれない」

「原告団の弁護士さんは何人位いらっしゃるの？」

「いやぁ多いよ。仮処分と本訴を合わせると 49 名」

「それは大所帯ですね。伊方原発はいつ再稼働したのですか？」

「2016 年の 8 月だよ」

「伊方原発運転差止仮処分申立ては、広島地裁で 2017 年 4 月、続いて松山地裁で 7 月に却下されたでしょう。山口地裁でも再稼働中止仮処分の申立てがされていますが、広島と松山の決定を受けて「大分裁判の会」の雰囲気はどうでしたか？」

「裁判官の多くは国に恥をかかせないような判決を書きたいそうだからね。でも「大分裁判の会」のメンバーはみんな意気軒昂だよ」

「ランソノカイですからね」

「その会のことは知らないけど、「大分裁判の会」の会報が 5 号まで出ている。最新号には河合弁護士の講演会報告も載っているから読んでみて」と彼は言うと、「元気でね」と言いながら「入口」を押して出て行った。彼は、出てからオヤ？という風に立ち止まって右と左を見て、「そうか」という雰囲気で左に曲がり、こちらを向いて手を挙げて挨拶をしながら、テントと九電との間を歩いて地下鉄の駅に急ぎ足で向かった。

(以下次号)

(文責 栗山次郎) 2017 年 9 月 18 日公開

参照：<http://ikata-sashitome.e-bungo.jp/kaihou/> で「伊方原発をとめる大分裁判の会」の今までの会報がすべて読めます。